

やだけノ葉ノ「アッシェンビルド」ヲ觀察スル時ニハ特ニ次ノ諸點ニ注意スルコト肝要ナリ

一、葉ノ上面ニ於テ小葉脈上ニ石英細胞ヲ有スルコト

二、葉ノ裏面ニアル嘴狀細胞ノ多クガ其一側壁又ハ兩側ニ於テ一乃至數個ノ乳頭狀突起ヲ有スルコト

三、葉ノ裏面ニアル屈折毛ハ皆同化組織上ニ於テ見出サル、コト

余ハコノ報文ニ於テハやだけト類似セルすゞたけ、やくしまだけノ葉ノ「アッシェンビルド」ノ記載ヲ省略セシモツレ等三種ノ檢索表ダケハ次ノ如クニ記述スルコト、セリ

檢 索 表

一、

葉ノ上面ノ小葉脈上ノ表皮ニ石英細胞アリ又同裏面ノ小葉脈上ノ表皮ニ屈折毛ヲ見出スコトナシ……………二

二、

葉ノ上面ノ小葉脈上ノ表皮ニハ殆ンド石英細胞ヲ有セズ又同裏面ノ小葉脈上ノ表皮ニハ處々ニ屈折毛アリ……………やぐしまだけ

三、

葉ノ上面ノ小葉脈上ノ表皮ニアルコロノ石英細胞ハ其數割合ニ多ク且ツ小ナル長方形細胞ト相接シテ存在ス……………やだけ

葉ノ上面ノ小葉脈上ノ表皮ニアルコロノ石英細胞ハ其數少ク且ツ多クハ小ナル長方形細胞ト重リテ存在ス……………すゞたけ

(昭和五年五月十日東京帝國大學植物學教室內ニ於テコノ報文ヲ記ス)

○杜仲軒赭鞭夜話 (十五)

久 内 清 孝

●柳ノ花穂ノ變異

柳類ノ花穂ニ分枝性アルコトハ今更物新シク言フベク其レガ餘リニ普通デアルガ一昨年余ノ挿木シタふりそでやなぎノ雄本ノ花穂ハ著シク分岐シ又岐、三岐、四岐等ヲ現ハシタ

更ニ著シキハしばやなぎデアル、此ノコトニ就テハ既ニ本誌第五卷第八號ニ記シテ置イタガ昨春横濱市根岸ニ於テ觀察シタ所ニヨレバ同地方ノしばやなぎノ花穂ハ一ツトシテ變化セザルハナク其變異性ノ著シキニ驚キタリ即チ雄穂中ニ雌穂ノ混在スルモノ、一部ハ♀ニシテ一部古ナルモノ、部分的ニ古古♀トナリシモノ、更ニ分岐セルモノ、帶化セルモノ、帶化シテ更ニ分岐セルモノ等實ニ多樣ナルモノアリタリ、柳ノ花ノ異常發育ニ就テハ近ク楊柳ノ専門學者木村理學士ガ本誌ニ執筆サレルカラ今ハコレ丈ニスル

●ぢんちやうげノ帶化

昨年四月四日東京府立六中堀江賢二君ノ好意ニヨリぢんちやうげノ見事ナ帶化現象ヲ見ルコトガ出來タ、採集者ハ長田武正君デ四月三日某處デ得ラレシト云フ、先端ニ鷄冠狀ニ花々相集リ各々ノ花序ヲ見ル能ハザルモ勿論數花序ノ集合セシモノラシキ觀アリ、長田君ガ葉序カラ推定シテ「三本ノ枝ノ合著ニ由ル」ト言ハレタガ帶化部分ノ最大幅員ハ約六「セ、メ」ニ達セリ、蓋シ珍奇トハ言ハザルモ異様ナル事實ト謂フヲ得ベシ尙此植物ニアリテハコノ現象決シテ稀ナラズ其後同様ノモノヲ塚本藥學士ヨリモ贈ラレタリ

●ひさかきノ花ノ色

ひさかきノ花色ハ淡綠色ト紫色トアリ、紫色ノ場合ニハ瓣片ノ中央部ガ紫色ヲ呈シ邊緣ハ白色ナルヲ普通トス殊ニ乾キタルトキ然リ、カ、ル事實ハ以テ種ヲ別ツニ足ラズト雖モマタ事實トシテ區別ヲナスベキモノト信ズ即チ一ツノ觀察ナリ、マタ花形ノ甚敷大型トナリ常態ノ約一倍半ニ達スルコトモ稀レナラズ

【牧野曰フ】ひさかきハ雌雄異株花或ハ時ニ雜居花(一株ハ雄、一株ハ雌、一株ハ兩性)ヲ開クモノデ其實ヲ結ブ花ハ雄花ヨリハ其體ガ小クテ淡綠色ノモノガ多ク、花體ノ大ナルモノハ雄花デ紫色ヲ帶アルノガ常デアル

●あかしでノ葎ノ色

ヲ見ルニ通常外面ノ一部ハ紅色ヲ呈スルモ北海道主要樹木圖譜ノ染色ハ黃ナリ内地産ノモノト北海道産ノモノトノ差カ將タ個體的ノ現象カ どちらデモよかんべート思フガ言フ丈言フコトニシタ

●やまときほこりとときほこり

本誌第二卷五號歐文欄十八頁ト十九頁トヲ見ルト我等ノ「ボタニスト」牧野先生ハ邦産ときほこりヲ二種ニ分チ各々 *Elastostemma laeteviens* Mak. (山ときほこり) *E. nipponicum* Mak. (ときほこり) トサレタガコノ問題ガドレ丈學者ノ認メル所トナツテ居ルカハ知ラザレ共近頃コレガ *Urticaceae* カラ無クナツテ居ル様ナ見方ヲスル人モアルラシイ

然シダ、コノ二者ハ顯著ナル存在デ分類學的トカ形態學的ト鯁鉾バツタ見方ヲシナクトモ余ハ常識的ニ二者ノ實在ヲ認識スルコトガ出來ル、エー先程御案内ノ通りときほこりハ東京附近ニ夏カラ秋ニ見ラレル一年生ノ草本デアルガ山ときほこりハ江戸表ニハ未見參ナルモ各地ノ山地ニ産スル多年生ノ奴デアル、イヤ其レノミデハナイ山ときほこりハ東京デ培ツテ見ルト三月頃カラ出芽シテ只今即チ太陽曆デノ五月二十一日ニハ蕾ガ出テ來テ居ル、然ルニ一方ノときほこりハ私ノ處デマダコレカラお目ざめデアツテ仲々ね坊デアリマスル然シ學者ト下手ナ横好キノ素人トノ間ニハ意見ノ相違ハ免レナイカラ右ノ様ナコトハ愚痴カモ知レナイカラ一言愚痴ツテオク

尙雷名天下ニ隠レナキ糞蟲君デ有名ナ蟲界ノ素人フアーブルさんノ昆蟲記カラ耳ヨリナ名文ヲ拜借シテ愚痴ノ共通性ヲ唱ヘルコトニスル「……これらの大家たちが、觸鬚の一關節に就いてはあんなに細かい詮議立ても厭はず、また耳觸りな名稱を採用することではあんなに目に角を立てて議論をするのに、問題が習性とか技能とか、昆蟲生活の最高表現に關してくると殆んど無關心であるのを見ると云ふのは、誠に悲むべきことではある

まいか。分類學者の昆蟲學は巨大な進歩を遂げ、我々をにっちもさっちも行かないやうにし我々を途方に暮させてゐる。いま一つの生物學者の昆蟲學は、唯一の興味あるものであり唯一の眞に我々の省察に値するのであるのに全く閑却されてゐて、一番誰でも知つてゐる種でさへその生態誌を持たないで、或はそれに就いて幾らか云はれてゐても相當重大な訂正を要する有様である。だがこんな愚痴はこぼしてみてもはじまらない」(岩波版昆蟲記第十卷二十九頁)

●はとむぎハ多年生ノコトモアル

はとむぎ (Coix Lachryma-Jobi L. var. frumentacea Mak.) は普通ハ一年生ト相場ガキマツテ居ル、然ルニダ、マタ多年生ノコトモアル、即チ余ノはとむぎハ一昨年地上部約三寸ノ處デ刈リ去リ其儘ニシテオイタ處、土ニ思ヒノ根ヲ殘シ昨年勿々舊株カラ芽ヲ出シテ來テ其株數八株ニ及ンダ、瑞祥ダカ奇現象ダカハ知ル由モナシダガ一ツノ事實トシテ記シオク然シ之レヲ以テはとむぎハ多年生ナリトガンバルノデハナイ之レカラ何年ツバクカはとむぎカ私カ死ヌマデ觀察スルコトニスル

●Ajuga mixta MAKINO.

東京ノ近郊ニハ右ノ如キ學名ノ草ガアル、コレハ T. B. M. XXIII. ニ牧野先生ガ *Ajuga nipponensis* Mak. ノ條下ニ記サレテ居ル名デアルガ其存在ヲ唇形科中カラ除去サレタお仁モアルトノコト然シ前記 T. B. M. ノ歐文六十七頁ニ記サレテアル明白ナ種デアツテ東京府下ノ練馬附近デハ春先ニイクラデモ見付カルノミナラズさうやじふにひとへとハツキリ區別ノ出來ル草デアルカラ素人ハ其存在ヲ充分ニ認メルコトガ出來ルト申シテオク

●*Potentilla supina* L.

本誌五ノ十第三一六頁ニ *Potentilla* sp. トシテオイタ植物ハ其後中井さんニ伺ッタラ *P. supina* L. (おぎごむし

る)デ朝鮮ニハ既ニ知ラレテ居タモノ、由從ツテ日本デハマヅ初見參ノモノ、由

○おはるさんノ植物趣味

久 内 清 孝

「千はやふる、神無月とよ、うらめしの嵐や」ハ世ニモ名高キじやがたら文ノ書出シノ文句デアル、余ガ此じやガ文ノ存存ヲ知ツタノハ黑板勝美博士ノおかげデアッタト記憶シテ居ル、ナンデモ今カラ二十年モ昔ノコトデアル當時余ハ草木ノコトヲ知ラズニタバ他ノ方面カラコノじやがたら文ヲ見タノデアッタガ今ニナルト草木ノ方面カラ此文ヲ思ヒ起シタクナッタ

ソモ、此文ハ千六百年代ニじやがたらニ渡ッタおはるト云フ女性カラおたつト云フ女ニ送ッタ文デアルガ文中「松かさ、この手がしわのたね、杉のたね、はうきぐさのたね」ノ送付方ヲ依頼シテアル、異郷ニサスラヒテ「かへす」なみだにくれて」望郷ノ念禁ジガタク、セメテ故郷ニアツテ見知ツタ草木ヲじやがたらナル吾ガ家ノ庭ニ培養シテ自カラ慰メヤウトスル心情ヲ當時ノ交通及ビ我國ノ國法ノコトヲ胸ニオイテ考フル時ハマコトニ同情セザルヲ得ナイ、イヤソレヨリモ右注文ノたねガ若シモ送ラレタトスルナラバ熱帶圈ノじやがたらデドシナ結果ニナツタカ知リタイモノデアル、世ニ往昔渡來シタ植物ヲ稽ヘル人ハ少クナイガ輸出シタルモノヲ云々スル人ハアマリ見受ケナイ様デアル、尤モコンナ事ハ稀有ノ事實デアラウ然シ夫レ故尙更面白イコトデアル、マタ、カ、ル例ノアルコトカラ古代ニ於ケル民族ノ移動ニ伴フ植物ノ移動ニ就テ我々ハ或ル暗示ヲ受ケルモノデアアル、即チ天孫民族ト其愛玩植物、鮮人ノ渡來ト彼等ノ持參シタ草木ナドハ單純ナ植物地理學者ニ無用ノコトカモ知レナイガマタ某々植物ノ我國ニ於ケル存在ノ解決ニハ一考ニ價セズト斷言スルコトハ一種ノ獨斷デアラウ、人情ハ古今東西同一デアルカラニハ有史前或ハ以後去來シタ人間ニヨリ輸入サレ輸出サレタモノ